

「満洲国」初期の文化事業と国立博物館の設立

大出 尚子

1. 報告要旨

本報告では、「日満(満日)文化協会」の活動および協会関係者の動向に注目しながら、「満洲国」国立博物館の建設がいかに行われたかを検討し、さらに国立博物館の展示活動とその変化から、「満洲国」初期の文化事業の政治性を明らかにしようと試みた。

国立博物館の設立は、1933年10月に創設された「日満(満日)文化協会」関係者によって進められた。なかでも「満日文化協会」委員の宝熙、羅振玉、栄厚や、黒田源次(満洲医科大学教授)、山下泰蔵(満洲医科大学教授)、杉村勇造(満日文化協会常務主事)、河瀬松三(文教部礼教司社会教育科事務官)、三枝朝四郎(満日文化協会主事)が尽力し、1935年6月1日に開館式が行われ、6月5日に一般公開に至った。館長には、楊鍾羲が就任した。当初、協会の日本側委員は羅振玉を博物館長に推薦していた。しかし、羅振玉は博物館が「協会立」なのか「国立」なのかという問題が未解決であることを理由に博物館長就任を拒否した。羅振玉が博物館長就任を拒否した真意について本報告では、日本人官僚が文化事業を進めていくことへの牽制、「満洲国」側の清朝の遺臣たちの影響力を保持しようとする態度だったのではないかとの見解を示した。

国立博物館の開館当初は、朱啓鈴旧蔵の宋・元・明・清代の刻絲・絲繡(開館記念として1935年に『纂組英華』が出版された)や、契丹(遼)の最盛期を築いた6代聖宗・7代興宗・8代道宗の陵墓から湯佐栄によって盗掘採集された墓誌、羅振玉が寄贈した銅器・明器・俑類などが重要展示品であったが、開館以後は東亜考古学会による学術発掘品など出掘の明らかな文物が増加し、展示構成に変化がみられるようになった。開館後の変化について本報告では、1936年4月に奉天故宮博物館が閉鎖され、その管理が国立博物館に引き継がれたことに着目した。奉天故宮博物館の閉鎖理由として、満洲国文教部発行の『文教月報』(第11号、1936年)所収の「文教部訓令」には、考古学資料の有無と財政的問題が挙げられている。だが、国立博物館に故宮の文物を一部移管したものの、それらを積極的に展示した形跡がないことから、清朝の文化的象徴である奉天故宮を閉鎖することで清朝色を排除しようとする意図があったのではないかと考えられる。

さらに国立博物館における展示内容の変化をみると、まず1937年の展示替えによって、慶陵における契丹(遼)時代の発掘品や輯安の高句麗都城遺跡資料などの考古学資料を展示することで「満洲色を出すことに努め」とされた。続けて1939年の展示替えにより、これまで博物館の中心的な展示であった墓誌に代わり、1933-1934年の渤海東京城遺跡における東亜考古学会の発掘品や1938年の慶陵における発

掘品などが公開された。このことから本報告では、国立博物館の機能自体が、清朝の遺臣たちの旧蔵品を展示する場から、東亜考古学会を中心とする「満洲国」内の学術発掘品の収蔵・展示の場へと転換していったという見方を示した。

以上の報告により、①「満洲国」の初期文化事業においては、日本のアカデミズムと清朝の遺臣たちとの間で対話・協力関係が成立し、そのなかで清朝の遺臣たちが実質的な役割を果たしていたこと、②奉天故宫博物館の閉鎖および、博物館の展示の中心は盗掘品や民間収集品から学問的手続きをふんだ、出扱の明らかな東亜考古学会の学術発掘品へと転換したことから、結果として博物館活動において清朝色が薄められていくとともに、鑑定にあっていた清朝の遺臣たちが活躍する場が狭められていったという、2点を明らかにした。

2. 報告を終えて

質疑応答では、中見立夫氏（東京外国語大学）より、①水野梅曉著『満洲文化を語る』（支那時報社、1935年）を参考にし、水野が「日満文化協会」の委員として日本側と「満洲国」側との折衝において重要な役割を果たしていた点も考慮すべきであること、②金梁と奉天故宫との関わり、③本報告の結論に「清朝色の排除」とあるが、果たして意識的に排除されたのか、また国立博物館では清朝色が排除されたというよりも、むしろ戦後も活躍するような人材（例えば李文信など）を育てていった側面があるのではないか、というご指摘を頂いた。

以上はコメントという形であったため、発表の場でお答えすることはできなかったが、特に②の、「満洲国」建国前の金梁と奉天故宫との関わりについては、中国東北の博物館のもつ性格を考える上で非常に有益な論点であると報告者自身も考えている。今回は1932年から1939年までの国立博物館についてという、期間と対象を限定して考察したために基本的な情報が不足していた。②と③については、今後、「満洲国」建国前から「満洲国」崩壊後の博物館事業について研究を深め、論拠を得た上で見解を示したいと考える。

（おおいで しょうこ：筑波大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程・
日本学術振興会特別研究員）